

[様式14]

(対象事業：1子どもを対象とした事業及びその開発にかかる事業 3ミュージアムを核とした地域の
人材・組織の育成・連携・活用に係わる事業)

事業名：移動美術館展

事業者名：平成19年度福岡県立美術館所蔵品巡回
展「移動美術館展」実行委員会

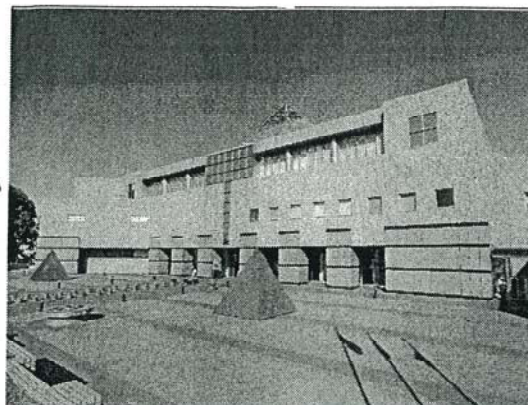
連携事業館名：福岡県立美術館、春日市ふれあい
文化センター（会場は春日市）

住所：福岡県春日市大谷6丁目24番地

TEL：092-501-1723

FAX：092-501-1669

HPアドレス：<http://www.fure-ai.or.jp/>



①施設概要

平成7年に開館した春日市ふれあい文化センターは、春日市における芸術文化の発信拠点として、また生涯学習の拠点として親しまれている。施設内には本事業を開催したギャラリーだけでなく、大小3つのホールや音楽スタジオ、研修室、工作実習室などさまざまなスペースを有している。春日市民図書館も併設されている。

②事業の意図目的

平成7年度からの継続事業を、テーマを新たに「美術と握手、美術で握手」と設定し、地域の人たち（とくに子どもたち）が気軽に美術と触れ合える機会だけでなく、美術をととして他の芸術文化と親しむ機会も提供することで、鑑賞者が美術と触れ合う喜びと鑑賞の奥深さを体験できる展覧会を目指した。

③事業概要

福岡県立美術館コレクションの中から、洋画、写真等、42点の作品を選び、子どもたちをはじめとする地域の人々に身近な「春日市ふれあい文化センター」のギャラリーで、次のような事業とともに、展覧会を開催した。

- ①子どものための鑑賞ガイド『びじゅつのヒミツ』の作成
- ②鑑賞のお手伝いをするボランティア・スタッフ「ハンズさん」の育成
- ③創造に結びつく作品展示の工夫
- ④音楽会や絵本イベントなど、多彩なイベントとワークショップの開催（計13回）

④事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 テキスト ワークシート その他（ポスター、チラシ、鑑賞ガイド）
作成した報告書等

ビデオ（）
冊子（）
その他（）

⑤参加者状況

参加者人数 延べ 3、376人

内訳：一般503人、高校生以下2、426人、65歳以上289人、その他158人

(1) 事業の実施状況について

福岡県立美術館では、平成7年度から所蔵品を各地域で紹介する「移動美術館展」を継続している。今年度は「美術と握手、美術で握手」というテーマを新たに掲げ、多くの人々が美術館に心理的な敷居の高さを感じているなかで、まず地域の人々(とくに子どもたち)が気軽に美術と触れ合える機会、つまり「美術と握手する」機会を提供した。また、美術ギャラリーのほか音楽ホールと図書館を備えている会場の特徴を活かし、美術と音楽と文芸とのコラボレーションを実現した。美術をとおしたさまざまな出会いの場、つまり「美術で握手する」場を作り出すことで、鑑賞者の好奇心を喚起し、美術作品を自由に「見る」ことの喜びや鑑賞の奥深さを体験できる展覧会を目指した。

本事業を、春日市内の小中学校に本展を授業の一貫として取り入れてもらうため、内容や広報等について、事前に先生方との協議を繰り返した。その結果、1) 出品作は、春日市在住の作家の作品を紹介しつつ、子どもたちが慣れ親しんでいるジャンルである絵画作品を中心に、技法や鑑賞法を学べるように、「風景画」「人物画」「静物画」「抽象画」の4コーナーに分ける、2) 子どもたちが自由に鑑賞するだけでなく、学芸員に



●ボランティアスタッフの解説を聴く小学4年生のみんな

よる作品解説や技法解説を行なうこととした。ほかに、作品を前にして親子や友だち同士、あるいは会場内スタッフとの会話をうながすクイズパネルを掲示したり、マスコットキャラクターを活かした色とりどりの会場を設営したりしながら、子どもたちが気楽に、自由に、のびのびと美術鑑賞を楽しめる環境作りを心掛けた。また、絵画と詩を組みあ

わせた絵本のような鑑賞ガイド『美ジュツのひみつ』を展覧会広報物と一緒に作製し、春日市内の小学4～6年生に事前配布した。

学校との協働と並行して、鑑賞の手助けや体験コーナーの運営を担当する会場スタッフとして、地域のアート・ボランティアを公募し、19歳から79歳まで、19名を採用した。8月から9月にかけて当館および春日市ふれあい文化センターで計5回の事前研修を行い、来場者を手厚くもてな



●描かれた絵のその後を想像／創造するワークショップ

した。

さらに会期中には、計13回におよぶイベントやワークショップを開催した。美術をとおして、音楽や絵本、詩といった他ジャンルの芸術文化と出会い、それらへの興味によってまた美術鑑賞の体験がさらに深まっていくという循環を目指した。プロによる音楽演奏と学芸員による美術作品解説をミックスした大規模なミュージアムコンサートや、描かれた絵画のその先を想像／創造する劇団によるワークショップをはじめ、美術ファン以外のさまざまな層からの参加を促した。

（２）地域との連携について

7月に実行委員会を立ち上げて以降、福岡県立美術館と春日市ふれあい文化センターとの協働により準備・運営を行なってきた。出品作品は全て福岡県立美術館所蔵のものであるため、展覧会内容は美術館が中心になって検討し、地域での広報や、学校など各種団体との橋渡し、ボランティアスタッフのケアなどの運営面は主に春日市ふれあい文化センターが受け持った。ワークショップやイベントの企画、ボランティアの研修などについては適宜分担して行なった。

また、本事業は子どもたちのための教育普及的側面が強いため、春日市内の小中学校との連携は必須であった。市内の先生方のなかから有志で複数回集まってもらい、内容等の協議に加わってもらったほか、授業の一貫として団体見学を行なってもらう学校からは要望などを事前に聴取して、打ち合わせなどを経た後に当日を迎えるようにした。

ワークショップやイベントにおいても、さまざまな団体との協働・連携を図った。以下に団体名を挙げる：財団法人アクロス、劇団きらら、寒田美育の家、アトリエあそびえ、春日市民図書館、九州大学ユーザーサイエンス機構子どもプロジェクト、福岡ポエムネットワークコーポレーション。

（３）成果物について

春日市内の小学校への事前配布を行なった、子どものための鑑賞ガイド『美ジュツのひみつ』は、通り一遍の作品解説ではなく、絵と詩とを組み合わせることで、子どもたちの興味を喚起し、さらにその印象が鑑賞や時間を経ることで変容することを目指した。キャラクターを配した親しみやすいデザインも好評で、子どもたちだけでなく、絵本好きの大人にも喜ばれた。

（４）参加者の反応

学校団体に対しては、展示室の鑑賞だけでなく、別室での授業もあわせて行なった。展

示室内ではボランティアスタッフによる解説とともに作品鑑賞をしてもらい、別室での授業では、簡単な技法解説や抽象画の鑑賞法などを話した後、気にいった作品をカルタの絵札に見立て、思い思いの読み札をつくるという作業を行なった。会場の気さくな雰囲気も功を奏して、後日、自主的に展覧会を見に来る子どもたちも多く見られ、子どもたちにとっては非常に有意義な経験となったようだ。

大人にとっては、福岡県だけでなく日本の洋画界においても優れた作品が地元で、しかも手の届く距離で鑑賞することができると、その点が何より好評だった。同時に、子どもたちに向けてアピールしていた自由な鑑賞の楽しみ方が、大人にとっても非常に新鮮だったようで、楽しさを再発見したとの声をよく耳にした。

また本事業は、ボランティアスタッフにも充実した体験となり、事業終了後、ボランティア活動の歓びを知った彼らから今後の継続を望む声も出てきた。

(5) 芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

本事業はとくに子どもを対象にした事業であったが、その成果は、3,376 人の入場者のうち 2,426 人が高校生以下という数字がよく示している。うち学校団体鑑賞は、小学生 3 年が 1 校、小 4 が 2 校、小 5 が 2 校、小 6 が 6 校、中学校が 1 校を数え、多くの子どもたちに美術鑑賞の楽しさを伝えることができた。

また、子どもたちに美術の面白さを伝えるためには学校との連携が必須となり、本展は、春日市におけるその端緒を作ることができた。

地域住人たち自身によって文化事業が企画・運営されてはじめてその地域の文化力が向上するとすれば、よき鑑賞者を育て、学校の意識に変化をもたらし、運営者としてのボランティアスタッフを育てるきっかけとなった本事業の意義は大きい。

(6) 新聞記事等

○新聞記事

1989年10月1日

絵画鑑賞 気軽に楽しんで

油彩など42点ずらり

春日市ふれあい文化センター

県立美術館所蔵品 28日まで「移動美術館展」

「油彩など42点ずらり」
春日市ふれあい文化センターで、県立美術館所蔵品の「移動美術館展」が28日まで開催されている。会場には、油彩、水彩、墨画など、42点の作品が展示されている。作品は、明治から戦後の作品まで、幅広い年代とジャンルが揃っている。特に、戦後の作品は、表現の自由が広がり、個性が光っている。鑑賞者は、作品の背景や制作過程を知ることができ、鑑賞の楽しさを味わえる。会場は、明るく開放的な雰囲気で、家族連れや学生など、幅広い層の来場が予想されている。

児童向けの解説も充実

児童向けの解説も充実している。解説員は、専門知識と豊富な経験を持つスタッフが担当し、わかりやすく作品の魅力を伝える。また、ワークショップや鑑賞会なども開催されており、児童の興味を喚起している。会場には、作品の複製や関連資料も展示されており、鑑賞の楽しさをさらに高めている。



大膽なタッチの絵画に見入る来場者

朝日新聞（福岡版） 平成19年10月1日 朝刊

新聞紙で飛び出す名画作り

ワークショップ11人参加

春日市大谷の市ふれあい文化センターで、開催中の県立美術館所蔵品巡回展「移動美術館展」の関連イベントとして、ワークショップ「飛び出す名画」が実施された。参加者は、新聞紙を使って、名画のイメージを再現し、飛び出す作品を作った。参加者は、新聞紙の質感や色合いを活かし、名画の雰囲気を再現しようとした。作品は、新聞紙の特性を活かし、飛び出す効果を出している。参加者は、名画の魅力を再発見し、創作の楽しさを味わった。

春日の県立美術館巡回展会場で

ワークショップは、春日の県立美術館巡回展会場で行われた。参加者は、新聞紙を使って、名画のイメージを再現し、飛び出す作品を作った。参加者は、新聞紙の質感や色合いを活かし、名画の雰囲気を再現しようとした。作品は、新聞紙の特性を活かし、飛び出す効果を出している。参加者は、名画の魅力を再発見し、創作の楽しさを味わった。



絵をとりこみ、新聞紙で飛び出す名画作り

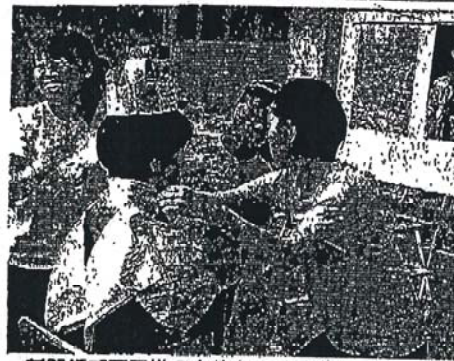


野十郎の絵の説明を受ける参加者たち（作品展示は28日まで）

（やじゅうろう）個展で死んだという設定にした野十郎大佐の、パリの風景から、絵に取り組んでいる。野十郎の絵を参考に、飛び出す作品を作った。参加者は、新聞紙の質感や色合いを活かし、名画の雰囲気を再現しようとした。作品は、新聞紙の特性を活かし、飛び出す効果を出している。参加者は、名画の魅力を再発見し、創作の楽しさを味わった。

（やじゅうろう）個展で死んだという設定にした野十郎大佐の、パリの風景から、絵に取り組んでいる。野十郎の絵を参考に、飛び出す作品を作った。参加者は、新聞紙の質感や色合いを活かし、名画の雰囲気を再現しようとした。作品は、新聞紙の特性を活かし、飛び出す効果を出している。参加者は、名画の魅力を再発見し、創作の楽しさを味わった。

よみうちかわらばん（福岡南部） 平成19年10月13日



新聞紙で王子様の衣装をつくる参加
者＝春日市ふれあい文化センターで

絵のイメージ
新聞紙で表現
春日で鑑賞会
絵画を眺めるだけでなく、新聞紙を使ってイメージを表現するユニークな鑑賞会が30日、春日

市の市ふれあい文化センターであった。市内などから11人が参加。久留米市出身の画家、高島野十郎の作品を見た後、熊本県「劇団きうち」の面員とともに、自分たちでつくった物語に沿って、

新聞紙で仮装した。リンゴをもった自画像を見て、「リンゴを食べ過ぎて大往生する高島バリの風景画から「描いている様子を住民にのぞかれている高島」などと設定。新聞を切ったり、丸めて棒状にしたりして、リンゴや王子様の冠をつくっていた。太宰府市の小学4年生、森岡通

大(10)は「鑑賞は普段おまじないだけで、新聞を切ったり、張ったりするのが楽しい」。

毎日新聞（福岡版） 平成19年10月18日 朝刊

○テレビ、関連誌等

ケーブルステーション福岡「りんごのきもち（ワークショップ）」

平成19年10月8日、9日（10分程度放映）

ケーブルステーション福岡「移動美術館展作品紹介」

平成19年10月24日～26日（10分程度放映）